

金井三笑と鶴屋南北の間

加藤 次直

一 はじめに

金井三笑は寛政三年六月に『世界綱目』の原型を作った。それは歌舞伎制作のための参考書であるとか、「世界定め」のための便覧という意味の他に、そこには、歌舞伎の「世界」を人名によってとらえ、義太夫浄瑠璃や歴史を本説とするといった分類意識が見られる。それは大きく変わりつつあった当時の歌舞伎に対して、自分の体験のなかに生きている歌舞伎を固定化し、「世界」の利用のしかたに一定の枠組みを与えるものであった。

こうした保守的思考によって制作された『世界綱目』は「世界定め」が行われている間は、秘伝書としての性格を持っていた。

「世界定め」が行われなくなった後、『世界綱目』が歌舞伎作者の間に転写されるに従い、『世界綱目』は幕末歌舞伎の影響を受け、増補、改変されていった。

『世界綱目』を筆写した人物でもある、歌舞伎作者、三升屋三三治によって、嘉永元年に書かれた『作者年中行事』には、次のような記述がある。

安永天明に至りては金井三笑、桜田治助を作者の祖とする。後に又、勝俵蔵鶴屋南北此人出て、芝居の風義狂言の当世を考えて今専らつかひし狂言は南北風多し。

こうした記述からもうかがい知れるように、嘉永元年当時、鶴屋南北の歌舞伎の作風の影響が大きかったにも関わらず、鶴屋南北の「世界」に関してはなぜか、『世界綱目』の増補からは徹底的に無視されている。

これはいったいどうしてなのだろうか。次の章で述べる古井戸氏の説にみるように、金井三笑から鶴屋南北への作風のつながりは明らかである。しかし金井三笑の作った『世界綱目』は歌舞伎作者の間に転写され、一方、鶴屋南北の作った歌舞伎は『世界綱目』の転写の過程で無視されていく。この大きな違いは、ふたりの間のいったいどのような作風のへだたりによるものなのだろうか。金井三笑を保守、鶴屋南北を革新ととらえるべきなのであるか。あるいはそうではないのか。この問題を本稿で明らかにする。

一 従前説の整理

金井三笑に関しては古井戸秀夫氏にまとまった研究がある。そこで古井戸氏の研究をまず整理してみることで、

問題点を明確にする。

古井戸氏は「狂言作者金井三笑の登場とその意義」⁽¹⁾のなかで、金井三笑が番付にあらわれない空白の時期の活動をも明らかにしようと、主に、『評判記や『秀鶴日記』の記述から、金井三笑が狂言作者として江戸の歌舞伎界に登場する意義を明らかにした。

金井三笑の行動を一言でいえば、芝居内における権力を握ろうとするものであり、そのことが結果として、江戸の狂言作者が芝居内の者として制度化される礎となったのである。以下古井戸氏の明らかにしたことをまとめる。

1 金井三笑は、宝暦四年十一月から一年間、中村座の狂言作者として名前を番付に載せるが、その後三年間番付から名前が消える。この理由は宝暦五年度は帳元と作者を兼ねていたからである。中村座の帳元としての地位を傍輩に譲った時期は、宝暦九年十一月森田座へ狂言作者として出勤する以前であり、その理由は、おまつを団十郎に嫁がせるなどし、団十郎との結びつきを強め、その庇護のもと、狂言作者として他座への出勤も認められるようになったのではないかと推測される。

2 金井三笑が番付に登場する、宝暦四年当時、狂言作者を育成するシステムは江戸の芝居の中に確立していなかった。上方下り系の狂言作者が座元や役者から距離を保つことで、大立者となっていたのに対し、金井三笑は、帳元出身の江戸根生として、狂言作者の職分だけでなく、帳元としての立場をも合わせ持つことによって、

それまでスケの文人としての立場にあった上方下り系の作者たちと違い、芝居内の者としてみずから積極的に役者と同じ次元にたち、役者を支配し、実質的に権力を失いつつあった座元にかわる新しい勢力になろうとした。つまり金井三笑は帳元出身の江戸根生として、むしろ座元や役者と積極的に関係を持つことで大立者となった。それは具体的には四代目団十郎の庇護により出世し、その後、多くの役者を取り立てることで、彼らを支配し、自らの権力を築いていった。金井三笑は江戸の狂言作者がスケとしての立場から、芝居内の者として制度化されていくための道を切り開いた人物であり、その象徴である。

古井戸氏が明らかにした「権威」、「革新」ということと、『世界綱目』に指摘できる「保守」ということは次のように説明できる。金井三笑は従来の江戸歌舞伎のありかたに対し、旧来の座元にとつてかわるような権力を握るために、それまでのありかたを変えてしまうような革新的な試みを企て、それが摩擦ともなり、中村座を追放されたり、作者連名に名前が載らないといった空白の時期ができたりした。その一方で、彼がつかんだ作者としての権威を守るために、彼の最晩年には『世界綱目』を作ったと考えられる。それは自らの分類意識を固定化させ、権威化するという保守的な面ももち、後の江戸の狂言作者が芝居内の者として制度化される礎となったと考えられる。

つぎに古井戸氏は「三笑風と桜田風」⁽²⁾のなかで、金井三笑と桜田治助をとりあげ、二人の作風の違いを論じた。

台帳が多く残っている桜田治助と異なり、金井三笑の台帳は「うれしく存曾我」のみしか残っていない。この作品は寛政二年正月という金井三笑の最晩年の作で、作者連名には三笑の名前は別座として載っているため、どこまで彼の影響があったものか不明である。また現在残されている台帳は端本である。「しかも、奈川七五三助の写本のため細かいニュアンスがつかみにくくなっていて、たとえば金井三笑作としても、この作だけで盛時の金井三笑の作風を考えるのは危険である」としている。

そこで古井戸氏は、「天明から寛政にかけての江戸狂言には、筋や見立など表面にあらわれる趣向をのぞけば、狂言作者が作品を創り出す内面的な発想には型がある。まず、立作者格に至らない作者達では出勤する一座で系列ができ、その系列が作風にまで影響をして、現存の台帳でみるかぎり中村重助・瀬川如皐ら中立的立場の作者をのぞけば、桜田治助・笠縫専助・木村園治・村岡幸治・福森久助ら一派と、増山金八・松井由輔・勝俵蔵ら一派とに分けることができる」とする。そこで「前述の桜田治助以下の作者達に共通してみられる型を桜田風とし、増山金八以下のそれを三笑風と考え、両者の持つ基本的な型の相違を明らかにしようとする。金井三笑個人の作風を特定することは資料が少ないため難しいが、「三笑風」を明らかにしようとする中で、資料の範囲が広がり、また、『役者全書』『作者店おろし』などの雑書の記述をも読み解くことで三笑風というものを明らかにしようとした。

その結果、三笑風とは、場面場面が論理的につながっていく内に、思いもかけない結末を展開していく、それを異風と呼んだものといえよう。このように、三笑風の仕組の特質は、狂言の筋が連続して展開することによって、異った世界へと移りかわっていくところにあるのである。「とす。それに対し、桜田風は「複数の世界の

筋が連続するよりも、むしろ断片的に独立している。」とする。このことを古井戸氏は三笑風は「複数の世界が次から次へと連続して変わっていく」のに対し、桜田風は「複数の世界がはじめから終りまで、それぞれに独立して並列的に仕組まれている」とも言いかえている。

つまり伏線がちちんとはられ、思いがけないつながりではあっても、連続していくのが三笑風で、ひとつひとつの場面や「世界」がばらばらに独立し、それぞれが並立しているのが桜田風ということになる。

さらに古井戸氏はその連続のあり方を「金井三笑は従来「有ル仕内」を他の役名に置きかえて世界を複数にし、さらに、仕内をも含む趣向を他の趣向と組み合わせ、そして、実事の趣向と悪の趣向とを入れかえることによって、実は悪と見えたのが実で、実が悪だという仕組をくり返して用いている。このように仕組むことによって、普通では考えられない登場人物が、まったく新しい仕打ちをすることになるのであり、それを三笑風の異風と呼ぶのである。」と説明する。

そして、古井戸氏はこの金井三笑の作風を歌舞伎史の中で、次のように位置づけている。

「浄るり狂言の影響によって、筋がだんだん複雑化していく中で、とくに宝曆以降、これ以上筋を複雑にしても、かえって面白くなくなるのではないかという時代に、金井三笑はあくまでも狂言全体を管理するという面からも全体の筋の仕組において狂言作者としての魅力を發揮しようとしたのである。（中略）『戯場年表』で「初め出したる品を後々迄遣ひて役に立、三建目より筋をつなぎ、六建目は大詰、一番目へ持込」といわれるように、小道具をはじめとする伏線に統一をとるよう配慮を行っており、それが各種の付帳へと成長していったものと思われる。そのようにして、たとえ一座の他の狂言作者に書き場を与えようと、一日の狂言全体を管理する

ことができたのである。このような芝居内の者として狂言全体を管理する三笑風は南北風へ、そして、スケの文人として担当した部分においてのみ責任を持つ桜田風は福森風へと伝承されていくことになるのである。」

以上引用したように、古井戸氏がこの論文で明らかにしたことは三つある。

第一に、「実は」で結びつけられる役名や「世界」が、「三笑風」では連続し、「桜田風」ではそれぞれ独立し、並立的である。

第二に金井三笑は狂言全体の連続性を保つために、狂言全体を管理した。そしてそのための書き物が各種の付帳へと発展した。

第三に芝居内の者として狂言全体を管理する「三笑風」は「南北風」へと、受け継がれスケの文人として担当した部分においてのみ責任を持つ桜田風は福森風へと伝承されていった。

古井戸氏が明らかにした「三笑風」と「桜田風」の違いを承け、この論文では「三笑風」と「南北風」の共通性と違いを考えるために、金井三笑が確実に関わった作品のなから、「三笑風」と「桜田風」、「三笑風」と「南北風」の問題を考察してみる。その方法として、古井戸氏も三笑風と桜田風の違いの中で重要な点であると指摘した、複数の筋を結びつける上での狂言の枠組みとなる「世界」の利用のしかたを中心に考え、それが『世界綱目』とどの程度関係があるのか考察する。

三 金井三笑と鶴屋南北の「世界」

（1）方法と作品の選択

金井三笑と鶴屋南北の「風」のつながりや、違いを考える手がかりとして、「世界」の利用の仕方を考察してみる。古井戸氏が述べているように、金井三笑の台帳は寛政二年正月に市村座で上演された「うれしく存曾我」しか残されていない。しかもそれは端本であり、金井三笑の最晩年にあたるもので、金井三笑は立作者ではなく、別座の地位にあり、この狂言がどの程度、金井三笑の「風」を伝えていたか、問題がある。しかし他には彼の台帳は存在せず、浄瑠璃正本、せりふ正本に彼の作ったものが残っているだけである。そこで、古井戸氏が明らかにした、金井三笑の「風」とは狂言全体のつながりをつけることとしたことに着目し、金井三笑の「世界」の利用の仕方を検討することで、鶴屋南北の「世界」の使い方とを比較することで、そのつながりと違いの実際を明らかにする。

その方法としては役割番付、絵本番付に載る役名を分析し、さらに役者評判記の記述を参照するという方法をとった。ここでは比較の上で金井三笑が番付に名前を載せるすべての狂言⁽³⁾を対象としたが、比較の精度を高めるために、以下の条件に絞った。

- 1 役者評判記の記述を参照できるように、顔見世狂言を中心に、二の替り狂言も採用した。
- 2 比較の都合上なるべく近い上演年次であること。

この二点から金井三笑の狂言を分類すると次のようになる。

ただし天明六年十一月以降金井三笑が番付に名前を載せてからは、すべて勝俵蔵と同座しているため、CはA、Bと厳密な意味での比較にはならないかもしれないが、この条件から次の七つの狂言を比較の対象とした。

A 桜田治助とも鶴屋南北とも同座しなかったとき

1 宝暦九年十一月市村座「阿国染出世舞台」

2 明和四年十一月市村座「鶴重藤咲分勇者」

3 安永四年十一月中村座「花相撲源氏張膽」

B 桜田治助と同座したとき

4 宝暦十年十一月市村座「梅紅葉伊達大關」

5 明和三年十一月森田座「角文字伊豆入船」

C 鶴屋南北（勝俵蔵）と同座したとき

6 天明六年十一月中村座「雲井花吉野壮士」

7 天明七年十一月森田座「兄弟群高松」

D 参考

8 寛政二年正月 市村座「うれしく存曾我」

(2) 作品分析

まず金井三笑が桜田治助と同座した場合としなかった場合の比較を行う。しなかった場合として1の「阿国染出せ舞台」、桜田治助と同座した場合として4の「梅紅葉伊達大關」を例に挙げる。なお「世界」の認定は国会本『世界綱目』の分類にしたがう。

1 「阿国染出せ舞台」

この作品は「東山」の世界で作られている。そのなかに「やり屋権三」（尾上菊五郎）、「表具屋嘉平治」（市川團十郎）という鍵の権三、松下嘉平治を想像させる人物が役割に名前が載るものの、それぞれ一人のみであり、「世界」とするには疑問が残る。

なお役割番付には「実は」であるとか「本名」であるといった記述はない。

4 「梅紅葉伊達大關」

この作品は「奥州攻」の世界に職人、下人、神職などの江戸時代の現在の市井にもいそうなひとびとと「奥州攻」といった過去の「世界」が「本名」を名乗るといっかたちで連続している。

この発想は現在のふるまいはかりそのものそのものであり、歴史に固定化された姿（名前）こそ、ほんとうといった意識がうかがえる。

たとえば「三でうこかじむねちか本名かつたの二郎なりのぶ」（尾上菊五郎）「なべいかけ六兵衛本名あべのさだとう」（市川團十郎）「せ川わたぼうしうりたちはなや彦宗」（市村龜蔵）などであるが、ただしこれが役割番

付に載るのは「第二」のみであり、こうした趣向が全体をつらぬいていたかは疑問である。

1と4は「世界」の利用において、A 桜田治助とも鶴屋南北とも同座しなかったときは「本名」、実は「という形で名前の変更による、「世界」の変更はみられないが、B 桜田治助と同座したときは、それが別々の「世界」を組み合わせるというものではないにしても、市井の人物に近い人々が、実は「世界」という歴史上の人物であるとする組み合わせの傾向が指摘できる。はたしてそつなのか、2と5を比較することで確認する。

2 「鶴重藤咲分勇者」

この作品は「平家」「保元」「頼政」といった隣接する役名を載せている。これはいくつかの「世界」を組み合わせたという意識よりも、むしろ「平家」の「世界」といった意識なのであろう。「第一」のなかに「鉢叩西ねんぼう実八東三条鶴の化障」（市村羽左衛門）、「奥州宮城野の百姓茶平実八東三条鶴の化障」（市村羽左衛門）といった組み合わせの記述がみられる。これは4と同じように考えることができる。

5 「角文字伊豆入船」

この作品は「伊豆日記」の「世界」に隣接する「曾我物語」「平治物語」といった「世界」が組み合わせられている。しかしこれも「世界」を組み合わせたとするよりは広く「伊豆日記」の「世界」というものである。また役割番付の「第一」には「げたばしりの権本名長田の太郎かげ宗」（松本友十郎）、「そうりとりとも介本名兵衛佐よりも」（坂東三津五郎）というように、身分の低い人が実は「平治」や「伊豆日記」という「世界」の人物であり、これは「第二」の「やつこつねすけ本名工藤金若」と同じである。これも4と同じである。

以上のことから1と4の比較においてみられた傾向が再確認できた。

それでは今比較したAとBの結果をもとに、Cをみてみたい。まずここで確認しておかなければいけないことは、Bで検討した作品において桜田治助は二枚目作者であり、金井三笑につぐ地位であるのに対し、鶴屋南北（勝俵蔵）はまだそこまでの地位はなく、三枚目くらいの地位であり、この地位の作者がどの程度、狂言に影響を与えることができるのかはわからない。また金井三笑は立作者から降り、別座にいた。よってCはその立作者である、中村重助の影響かもしれないし、A、Bよりも少し時代がくだった天明という時期の歌舞伎の特徴なのかもしれないということを念頭にいれながらも、比較を行う。ちなみに6、7は中村重助が立作者であり、金井三笑が別座にあり、勝俵蔵が三枚目の地位にいる。

6 「雲井花吉野壮士」

この作品の「世界」は「太平記」である。大谷広治、尾上松助が「実は」で「太平記」の「世界」につながる役をするが、詳細はよくわからない。

7 「兄弟群高松」

この作品の「世界」は隣接する「平家」「義経記」「源平軍」「曾我」といった「世界」の役名が載るが、これも「義経記」の「世界」をひろくとったという意識程度なのであろう。ただ、「けんもつ太郎頼方」（沢村仲五郎）という「苅萱」の「世界」がまざっているが、「苅萱」はこの一例だけであり、実際に「苅萱」の「世界」がないまぜられているのかはわからない。

C 鶴屋南北（勝儀蔵）と同座したときで分析した二つの作品は、後の鶴屋南北の作風からは遠く、「世界」が組み合わされたり、「実」で連続したりということもすくない。これは中村重助の作風の影響かもしれない。

以上のことからA、B、Cともに大きな差はない。強いて言えば、Bの桜田治助と同座したときに、「実」でつながる役が多いということが言える程度である。このことは金井三笑が狂言の全体に責任を持ったということと関係があるのかもしれない。また、わずかながらみることができた、「世界」の組み合わせにおいて、金井三笑は、うそ、いつわりで満ちた狂言の現在に、「本名」を名乗ることで、立ち現れた、ほんとうの過去の時空までも変更することはしなかった。金井三笑の作風が「異風」であっても、彼が登場人物に本名を名乗らせることで立ち現れる過去の「世界」は本説のある浄瑠璃的「世界」なのである。

参考ながらDの金井三笑の台帳が唯一残っている「うれしく存曾我」は、台帳に残る部分は、一番目で現在確認できる絵本番付には、その部分は見ることができない。また台帳は、途中で途切れており、この、角力取の志賀之助や舟波屋助太郎が、曾我」の世界の五郎、十郎と結びつけられるのではないかという推測はできるもの、確実な、「世界」の連続のありかたはわからない。

四 まとめ

金井三笑の狂言は、その「世界」の利用において、「異風」ともいわれる利用のしかたをした。それは本名を名乗る前に「実」と見えたものが、本当は「悪」、また「悪」と見えたものが、本名を名乗ることで本心をつち

あけ、ほんとうは「実」というものであり、そのつながりは、本心を聞けば、論理的に納得できるものであり、いわば「順」ともいふべきつながりである。つまりそれは「実は」で名乗られる「名前」の背負う行動をうまくなしとげるための、かりそめの「実」であり、「悪」であった。それゆえ「世界」に登録された、歴史、伝説、浄瑠璃などによって人々に記憶されている「名前」の持つ価値観にはなんら変更は加えられていない。

しかし、金井三笑の狂言の「異風」と呼ばれるところをひきつぎ、さらにそれを自由に発展させた鶴屋南北は、その「実は」でつながるつながり方も、逆転や反転といったしかたのつながりかたをしている。そして、それは従来の「世界」が形成してきた「名前」の持つ価値観までも、逆転、反転させてしまう。そうした奇抜さが、価値観の大きく変動していった幕末の観客に受け入れられたが、それは「世界」に登録された「名前」の持つ価値観を崩しかねないものであった。その結果、「ほんとう」というものがわからなくなっていく。それはいわば人々の共通の価値観となった「世界」を虐待するかのような行為であった。こうした南北的「世界」が、当時の観客にいくらか支持され、くりかえし上演されても、それは古い狂言作者の常識からはみだすこととなり、南北はその自由さゆえに、従来の狂言作者の勢力から違和感をもたれ、南北の作品が繰り返し上演され「世界」となっても、それは「世界」ではないと認識され、『世界綱目』からもオミットされていたのではなからうか。

注

- (1) 古井戸秀夫「狂言作者金井三笑の登場とその意義」『近世文芸研究と評論』八号、昭和五十年五月
- (2) 古井戸秀夫「三笑風と桜田風」(上)『近世文芸研究と評論』十一号、昭和五十一年十月、(下)『近世文芸研究と評論』十三号、昭和五十二年十一月
- (3) 「参考 金井三笑作品ノート」を参照のこと (日本語日本文学科 助手)

金井三笑と鶴屋南北の間（加藤）

参 考

金井三笑作品ノート

上演年次
座元
外題
よみ
作者連名
宝暦四年十一月
中村座
三浦大助武門壽
宝暦五年正月二日より
中村座
若緑錦曾我
わかみどりにしきそが
中村太郎右衛門
沢井注蔵
おくの佐介
藤井幸助
金井三笑

宝暦五年六月
中村座
江戸鹿子松竹梅
宝暦五年八月朔日より
中村座
信田長者柱
しだちやうじやばしら
中村太郎右衛門
沢井注蔵
おくの佐介
藤井幸介
金井三笑
宝暦九年十一月朔日より
市村座
阿国染出世舞台
おくにぞめしゆつせぶたい
金井三笑
奥野佐助
津打伝十郎

市川軍蔵
並木蛙柳
宝暦十年正月十八日より
市村座
振分髪末広源氏
ふりわけがみすへひろげんじ
金井三笑
奥野佐助
津打伝十郎
市川軍蔵
並木蛙柳
宝暦十年三月
市村座
曾我万年柱
宝暦十年六月四日より
市村座
曾我万年柱
そがまんねんばしら

金井三笑
奥野佐助
津打伝十郎
宝暦十年霜月朔日より
市村座
梅紅葉伊達大關
むめもみちだてのあふきど
金井三笑
桜田治助
宝暦十一年正月十五日より
市村座
江戸紫根元曾我
ゑとむらさきこんげんそが
金井三笑
桜田治助
金井宗輔
金井三平
宝暦十一年八月七日より

金井三笑と鶴屋南北の間(加藤)

市村座 鹿大和文章 にしきどりやまとぶんしやつ 金井三笑 吾妻家輔 金井三平 宝曆十一年霜月十一日より 中村座 日本花判官鬮 にほんがはなはうぐわんびい き 金井三平 津打伝十郎 金井三笑 奥野左介 松井介十郎 宝曆十二年二月九日より 中村座 曾我鬮二本桜 そがびいきにほんさくら 金井三平 津打伝十郎 金井三笑	奥野左介 松井介十郎 宝曆十二年七月十五日 中村座 玉藻前桂簾 たまものまへかつらのまゆず み 金井三平 津打伝十郎 金井三笑 奥野左介 松井介十郎 宝曆十二年十一月朔日より 中村座 柳葉伊豆形貌観 なぎのはいつのすがたみ 金井三笑 金井三平 川井金次 増山金八 奥野佐助 宝曆十三年二月朔日より	中村座 百千鳥大磯通 もうちどりおほいそがよひ 金井三笑 金井三平 川井金次 増山金八 奥野佐助 宝曆十三年七月十五日より 中村座 高野山蛇柳(三番目) 宝曆十三年五月 中村座 奥野佐助	市村座 若木花須磨初雪 わかきのはなすまのはつゆき 金井三笑 河井金治 平田文治 僕宗介 奥野佐助 明和二年一月 色上戸三組曾我 明和二年七月十五日より 市村座 女夫星逢夜小町 めうとほしあふよこまち 金井三笑 河井金治 平田文治 僕宗介 奥野佐助 明和二年霜月朔日より 市村座 降積花二代源氏
--	---	--	--

金井三笑と鶴屋南北の間（加藤）

ふりつむはなにだいげんじ	俣宗助	明和四年霜月朔日より	市村座
金井三笑	奥野瑳助	明和四年正月十八日より	伊勢曆大同二年
河井金治	明和三年九月九日より	森田座	いせこよみだいどうにねん
平田文治	市村座	角文字伊豆入船	金井三笑
俣宗助	飯名手本忠臣蔵	つのもじやいづのいりふね	増山金八
奥野瑳助	明和三年霜月朔日より	金井三笑	中村清九郎
明和三年二月十一日より	森田座	桜田治助	山路平蔵
市村座	角文字伊豆入船	山路平蔵	志葉章助
咲増花相生曾我	つのもじやいづのいりふね	岡田長蔵	河井金治
さきますはなあいをいそが	金井三笑	奥野瑳助	明和五年二月五日より
金井三笑	桜田治助	明和四年正月十八日より	市村座
河井金治	山路平蔵	森田座	酒宴曾我鸚鵡返
山路平蔵	山路平蔵	皆寝百合若大臣	しゆゑんそがあふむがゑし
	山路平蔵	みなめざめゆりわかだいじん	金井三笑
	山路平蔵	金井三笑	増山金八
	山路平蔵	桜田治助	中村清九郎
	山路平蔵	山路平蔵	山路平蔵
	山路平蔵	志葉章助	志葉章助
	山路平蔵	河井金治	河井金治
	奥野瑳助	明和五年八月朔日より	明和五年八月（二十日）
			市村座
			菅原伝授手習鑑
			明和六年霜月朔日
			市村座
			雪梅顔見勢
			むつのはなむめのかほみせ
			増山金八
			仲喜市
			金井三笑
			梅田利介
			河井金次
			明和七年正月十五日より

金井三笑と鶴屋南北の間（加藤）

市村座 富士雪会稽曾我 ふじのゆきくわいけいそが 増山金八 仲喜市 金井三笑 梅田利介 河井金次	明和七年七月廿三日 市村座 粧相馬紋日 しなさだめさつまのもんび 金井三笑 仲喜市 梅田利介 増山金八	明和七年霜月朔日より 市村座 女夫菊伊豆着綿 めをとぎくいつのきせわた 金井三笑 仲喜市 梅田利助	村瀬政吉 増山金八 明和八年二月九日より 市村座 和田酒宴納三組 わださかもりおさめのみつぐ み 金井三笑 仲喜市 梅田利助 山田平三 増山金八	明和八年八月朔日より 市村座 けいせい名越帯 けいせいなごやおび 金井三笑 仲喜市 梅田利助 山田平三 増山金八	明和八年霜月朔日より 市村座 安永二年（三月十二日より） 市村座	市村座 梅花嗣鉢木 このはなよつぎはちのき 金井三笑 梅田利助 山田平三 中丸和潮 増山金八	明和九年一月 市村座 菅原伝授手習鑑 明和九年二月二十日より 市村座 振袖着更衣曾我 ふりそできさらぎそが 金井三笑 梅田利助 山田平三 常磐井淳平 増山金八	明和九年一月 市村座 安永二年八月五日より 市村座 四天王寺幟供養 してんわうじのぼりくやう 金井三笑 荻馬岱 仲喜市 梅田利助 山田平三 常磐井其堂	江戸春名所曾我 ゑどのはるめいしよそが 金井三笑 荻馬岱 仲喜市 梅田利助 山田平三 常磐井其堂	中村座 安永四歳霜月朔日より 花相撲源氏張膽 はなすまふげんじひみき
---	--	---	---	--	---	---	--	--	---	---

金井三笑と鶴屋南北の間（加藤）

金井三笑
山田平三
奥野栄治
田口金蔵
関口清五郎
常磐井田平
安永五歳正月二十二日より
中村座
懸賦歌田植曾我
かぞゑうたたつゑそが
金井三笑
山田平三
奥野栄治
田口金蔵
関口清五郎
常磐井田平
安永五年三月
中村座
恋娘昔八丈
安永五年四月
中村座
契鴛夢劍羽

安永五年五月
中村座
仮名手本忠臣蔵
天明六年霜月朔日より
中村座
雲井花吉野壮士
くもゐのはなよしののわかむ
しや
中村重助
勝俵蔵
正木英蔵
野羅会助
村岡幸次
金井三笑
天明七年二月八日より
中村座
大銀杏根元曾我
おふいてうこんげんそが
中村重助
勝俵蔵
正木英蔵
野羅会助
村岡幸次
金井三笑
天明七年五月
中村座
仮名手本忠臣蔵
天明七年八月十三日より
中村座
今川本領貢入船

村岡幸次
金井三笑
天明七年三月
中村座
助六名取八重桜（二番目）
天明七年四月六日より
中村座
傾城井出の山吹
けいせいゐでのやまぶき
中村重助
勝俵蔵
正木英蔵
野羅会助
村岡幸次
金井三笑
天明七年霜月朔日より
森田座
兄弟群高松
つらなるゑだむれたかまつ
中村重助
勝俵蔵
仮名章介
邑勇介
村岡幸次
金井三笑
天明八年正月
森田座
伊賀越乗掛合羽
江戸狂言作者

いまがはほんりやうみつぎの
いりふね
中村重助
勝俵蔵
正木英蔵
野羅会助
村岡幸次
金井三笑

金井三笑と鶴屋南北の間（加藤）

天明八年二月

森田座

雛形稚曾我

天明八年三月

森田座

仮名手本忠臣蔵

寛政二年正月十五日より

市村座

うれしく存曾我

増山金八

曾根正吉

勝依蔵

河竹文次

溪彦八

笠縫専助

武井藤吉

市菜介

高島吾助

玉巻恵助

金井三笑

寛政二年三月十五日より

市村座

花簾木母寺由来

はなみやげもくぼじのゆらい

増山金八

曾根正吉

勝依蔵

河竹文次

溪彦八

笠縫専助

武井藤吉

市菜介

高島吾助

玉巻恵助

金井三笑